

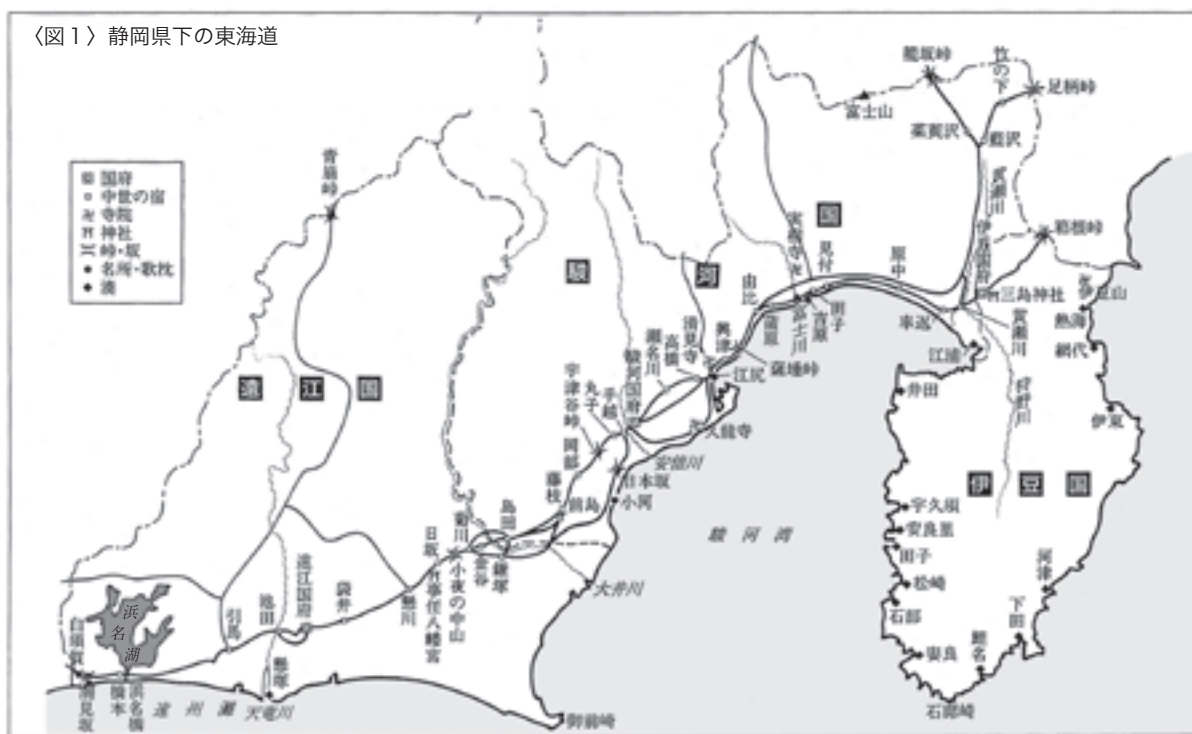
18 絵画が語る富士川の渡し

～舟橋と渡し舟～

1 鎌倉時代の東海道

鎌倉幕府の成立により京・鎌倉間の往来が盛んとなり、東海道の交通路が発達した。1185（文治元）年11月、源頼朝は駄路の法を定めて、鎌倉より上洛する使者に対して、伊豆国から近江国まで、荘園・公領を問わずに伝馬と食料を支給させると定めた。しかし、実際には荘園から人馬・食料の徴発を行うことは難しかったようで、守護・地頭にその任が課せられ、宿駅に早馬や物資の運搬にあたる疋夫が整備された。

やがて、街道各地には宿が成立する。宿は、旅行者に宿泊施設や必要な食料・物資を提供し、物資輸送にあたる人馬が置かれた集落である。〈図1〉にみられるように、静岡県下には大小さまざまな宿が成立し、流通・交易・情報伝達の間として大きな機能を果たした。これら宿の開設と経営には、御家人など武士がかかわっていたケースが多かったようである。



『静岡県史』別編3図説静岡県史 75頁より

2 河川の徒歩

街道の交通の難所といえは峠と河川である。静岡県下には天竜川・大井川・富士川など、天下に名だたる急流が存在し交通の障壁となった。鎌倉時代の紀行文にはこれらの河川を徒渉する様子が記述されており、『海道記』（『静岡県史』資料編5中世一 355頁）・『東関紀行』（『静岡県史』資料編5中世一 443頁）・『十六夜日記』（『静岡県史』資料編5中世一 647頁）から、そ

の様子を抜き書きしてみよう。

天竜川は、「大河にて水の面三町あれば舟にて渡る、水早く、波さかしくして、棹もえさし得ねは、大きなるえふりを以て横さまに水をかきて渡る」(『海道記』)とか、「天竜と名付たるわたりあり、川ふかく、流れはけしくミゆ、」(『東関紀行』)とみえ、大井川も「この川は中に渡り多く、水またさかし、流を越え島を隔てて、瀬々、かたかたに分れたり」(『海道記』)などとみえる。

富士川は、『海道記』には「この川は川中によりて石を流す、^{ふきょう}巫峡の水のみ何ぞ船を覆さん、人の心はこの水よりも峻しければ、馬をたのみて打渡る」とみえる。川中を石が流されていくような急流のありさまを、中国長江上流の難所「巫峡」に例えており、馬で渡河したと記述されている。また『十六夜日記』では、「ふし河わたる、朝川いとさむし、かそふれは十五瀬をそわたりぬる」とみえる。『海道記』の記述とは趣を変えて、合計15の瀬を渡ったと述べられている。川の流れが15本に分かれていたとの記述で、急流との表現はない。『海道記』の作者は4月、阿仏尼は12月(いずれも旧暦)に旅しているので、初夏と冬場の水量の違いが反映しているであろう。阿仏尼は冬の渇水期にあたり徒渉が楽だったようである。

このように橋のない河川は、徒歩ないし乗馬で渡るか、渡し舟か舟橋を利用して渡河した。

3 富士川の渡し

〈裏表紙写真下〉は、『一遍上人絵伝』第6巻第3段の^{あじさか}鰯坂入道入水往生の場面である。一遍は時宗の開祖で、1274(文永11)年から1289(正応2)年にかけて諸国を遍歴して念仏を勧めた聖である。『一遍上人絵伝』は、一遍の^{ゆぎょう}遊行の様子を描いた12巻の絵巻で国宝に指定されている。この場面では、^{むさし}武蔵国の^{とんせい}鰯坂入道が遁世して時宗への入信を希望したものの果たせず、念仏を唱えながら富士川で入水自殺して極楽往生する情景が描かれている。ここには富士川の渡しが見え、上流に舟橋が、下流に渡し舟が描かれていて、鎌倉時代の富士川を描いた唯一の絵画資料である。

舟橋は、右岸に杭が2本打たれ、左岸には^{かご}籠に河原石が詰められた石積みがあり、これらを2本の綱で結んで上流に^{へさき}舳先に向けた舟を繋いでいる。舟の上には舟の向きと直交する形に大きな板を敷いて固定し、その上に舟と同じ方向に幅の狭い板が敷き詰められている。このように当時の舟橋が三重構造であったことが読み取れるが、『一遍上人絵伝』は舟橋の構造を具体的に知ることのできる貴重な資料である。

渡し舟は、おそらく右岸から左岸に向かっているもので、船頭2人・旅人2人の4人が乗船しており、左岸の^{たたず}岸边にも1人佇んでいる。渡し舟で結ばれている富士川の両岸には家並が描かれており、これは富士川の渡しの宿でおそらくは^{いわぶち}岩淵であると考えられる。

一方、舟橋の両岸は河原の荒地である。渡し舟で渡河するルートが、通常の東海道の富士川の渡しであり、上流の舟橋は一般の旅客用ではなかったと考えられる。一遍が静岡県下を遊行していたのは1282(弘安5)年の夏であり、このころ鎌倉幕府は^{もうこ}蒙古襲来への対応策として交通手段の整備を進めていた。富士川の舟橋は、蒙古襲来に備えた政治的・軍事的用途で設けられた可能性があると指摘されている。舟橋ならば、一度に多くの軍勢を渡すこともできるからである。

〈参考文献〉

『静岡県史』通史編2中世
黒田日出男「絵画に静岡の中世を読む」(『静岡県史研究』第14号)